アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（4）～バーサ・マホーニー・ミラー②～

金　山　愛　子

はじめに

アメリカ絵本の黄金時代とそれに続く子どもの文学の充実と普及に貢献した人々として、これまでニューヨーク公共図書館員のアン・キャロル・ムーア（Anne Carroll Moore, 1879-1960）とボストンの書店員バーサ・マホーニー・ミラー（Bertha Mahony Miller, 1882-1969）について論じてきた。[1] 前稿ではミラーとその協力者エリナー・ホイットニー・フィールド（Elinor Whitney Field, 1889-1980）がボストンで始めた児童書専門店「少年少女のための本屋」（The Bookshop for Boys and Girls, 1916-1936）での仕事を詳しく検証し、彼らが編纂した子どもの本の500年の歴史を紹介した『子どもの本の黄金の国』（*Realms of Gold in Children's Books*, 1929, 以下『黄金の国』）を概観した。この本をきっかけとして、石井桃子がミラーと知り合い、英語圏の子どもの文学を日本に紹介することになったことも、前稿で紹介したとおりである。

本稿では、バーサとエリナー[2] の二人が、書店経営のかたわらに始めた子どもの本と読書に関する専門誌『ホーンブック』誌（*The Horn Book*, 1924~, 1945年第22巻から *The Horn Book Magazine* と改名。以後『ホーンブック』）を詳しく考察したい。[3]『ホーンブック』研究は、国内では藤野寛之が歴代の編集者のおおまかな紹介と代々の編集者の方針や仕事ぶりを紹介している。[4] 子どもと本に関わる多職種の者達が協働して児童書出版に影響を与えた運動とそのネットワークで活躍した人物については、Jacalyn Eddy の *Bookwomen: Creating an Empire for Children's Book Publishing 1919-1939* が詳しい。これは社会学的なアプローチで、子どもの文学の充実と普及に貢献した女性達の働きが俯瞰できるが、『ホーンブック』については、その役割の考察が中心であり、“bookwomen” と呼ばれる図書館員や編集者、書店員らの相互の人間関係に力点が置かれている。さらに Leonard S. Marcus による *Minders of Make-Believe: Idealists, Entrepreneurs, and the Shaping of American Children's Literature*（『アメリカ児童文学の歴史』）は17世紀植民地時代から21世紀に至る時間軸の中で、子どもの文学に関

わる人々にまつわるエピソードや出版社の盛衰を盛り込んだアメリカでの児童書出版史を扱う。しかしこれもまた社会学的なアプローチをとっており、『ホーンブック』は資料として重用されているものの、マーカスの主たる関心は子どもの本をめぐる人々の人間関係であるようだ。マーカスのこれらの人々の評価は時に断定的であり、仕事内容というよりはその性格に批判の矛先が向く傾向がある。むしろ『ホーンブック』の文学的価値を評価するものと言えば、Eularie Steinmetz Ross によるバーサ・マホーニー・ミラーの伝記 *The Spirited Life: Bertha Mahony Miller and Children's Books* であろう。

1959 年 8 月号の『ホーンブック』には、アメリカ図書館協会の児童奉仕部門によるバーサの功績を称えた献辞を載せている。

> バーサ・マホーニーの編集は、子ども達への愛、本に関する広い知識、創造的な個々人への深い共感、そして、教育としての読書への熱心で哲学的な関心の結晶であった。(“A Salute to Bertha Mahony Miller,” August 1959, pp. 278-279)

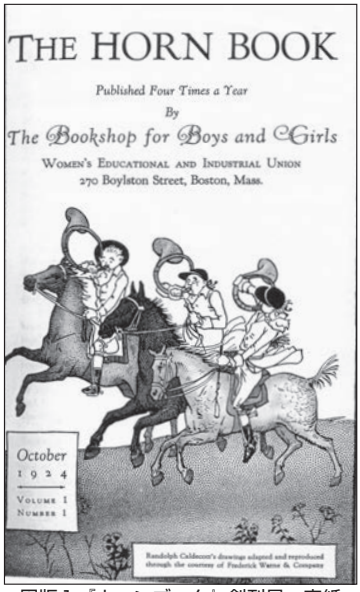
1969 年のバーサ・マホーニー・ミラー追悼号の “The Hunt Breakfast” では、1967 年にバーサがカトリック図書館協会からレジーナ・メダルを受けたことを記念して、長年の同士であり友であったエリナー・ホイットニー・フィールドがバーサの 50 年に及ぶ歩みを振り返って紹介している。(5) 「少年少女のための本屋」を開こうとバーサが考えた背景には、子どもの本は 1916 年頃には、出版社からも書店からも一般市民からも顧みられない存在で、出版社も子どもの本が利益につながるとは考えていなかったという事情がある。『不思議の国のアリス』『トム・ソーヤーの冒険』『若草物語』あたりが定番で、これを除けば数人の作家による動物ものが売れている程度だった。子どもには綺麗で明るい絵がついていれば安い本で充分であると考えられていたのである。「児童書」は当時あったが、「子どもの文学」は平均的な親にも教師にも特に重要な意味をもっていなかったとエリナーは振り返る。図書館員はなんとかその土壌を耕し種を播こうとしていたものの、大きな流れを創りだせないでいた。そんな社会状況の中で、子どもの教化目的の本や、おもちゃと同じような「児童書」ではなく、「子どもの文学」の出版と普及に尽力した一人がバーサだったのである。

『ホーンブック』は当時の子どもの文学の創作に関する第一級の一次資料である。本稿では創刊号や特色ある号を詳しく紹介し、バーサの編集方

針を明らかにすることで、この小さな雑誌がどのように子どもの文学を紹介し、それを豊かに育て、その普及を後押しし、読者を育てていったかを具体的に検証していきたい。

1.『ホーンブック』創刊とその成長

『ホーンブック』の創刊号（1924年10月号）は、書店の広報誌として刊行されており全体で18ページである。これは「児童文学とそれに付随する話題だけをあつかう、世界初の雑誌」であった（マーカス、p.156）。この雑誌は1924年初めにバーサとエリナーが書店の様子や子どもの本について知らせる広報誌としての雑誌発刊を思い立ち、同年10月に創刊された。この雑誌を二人は『ホーンブック』と名付けたが、「ホーンブックとは、十六世紀から十八世紀なかごろまで使われていた児童の初等読本で、アルファベットなどを記した紙を透明な角の薄板でおおい、持ち手をつけるというその作りから、『角本』と称されたもの」である。「卓球のラケットを四角くしたような形のそれは、子どもが自分で持ち、自由に扱える最初の本」であった（護得久、p. 9）。[(6)] 子どもが自由に扱える本であった角本という名前を自分達の雑誌につけたことから、バーサとエリナーの二人にとってこの雑誌の究極的な目的は、子どものための愉しみの創造であったことが窺われる。この雑誌の読者は大人であったとしても、それは子どもを取り巻く大人であり、編集者の関心の中心には常に「こどもと本」があった。さらに二人は、初等読本であった角本の硬いイメージから脱するために、19世紀イギリスの画家ランドルフ・コールデコットの絵本「三人の陽気な狩人たち」の絵を表紙に採用した（図版1）。躍動感のある喜びに満ちた狩人たちの絵は、彼女ら自身の子どもの本に関する思いを表すのにふさわしいと考えたのである。「角本」（hornbook）の“horn”と「角笛」「ホルン」の“horn”をかけて、バーサは創刊号の巻頭にその趣旨を述べている。



図版1『ホーンブック』創刊号　表紙

狩人達が、ホルンをどんなに強く吹いても表せないくらい狩りの喜びにあふれているように、私たちも狩り場である書店への熱意に満ちています。…それでもまず、子どものためのすばらしい本やその作家、画家、出版者のためにラッパを吹くべく、この雑誌を発行します。（October, 1924. p.1 護得久、p. 9）

本の解題やリストは子ども達自身にとって、そして両親、図書館員、教師にとって面白いものにしたいと思います。こうして、私たちのお薦め購入リストを更新していきたいと考えています。また他のところでは取り上げられないような本に関するニュースを載せたいと思います。子どもの文学のためにもっとも貢献した人々や覚えておかなければならない人々についての短いスケッチも時々紹介します。（October, 1924. p.1）

これだけの熱意にあふれながらも、読者や発行人がホルン吹きに飽き飽きしてくるといけないので、『ホーンブック』は、何か本当に面白いことがある時にのみ発行することとして、発行は年間４回以内にすると言い添えている。

内容としては、上述した雑誌発行の趣旨説明を伝える巻頭言で始まり、次に書店で扱っているおもちゃ劇場（トイ・シアター）をロバート・ルイス・スティーヴンソンのエッセイのタイトル「無地は１ペニー、カラーは２ペンス」より高価になってしまったことを残念がりつつ紹介している（p. 3）。それに続くブックリストでは４歳から 12 歳以上の子どもを年齢別に３つに分けて編集者の薦める 25 冊の新刊を紹介している。さらには書店の日々のスケッチとしてクロスワード・パズルの本の人気を紹介し、ボストン公共図書館の児童部主任司書でバーサの恩師アリス・ジョーダン（Alice M. Jordan, 1870-1960）による “The Bookshop from the Outside”（「外から見た少年少女のための本屋」）と題した寄稿を載せている。ジョーダンは「書店とは、収支を考慮してビジネスの眼識をもっていることが証明できるような本をそろえなければならないものだが、このように想像され組織された書店が、長続きできるのだろうか？貧弱な思いつきで安く作られた大量の本を排して、『優れた本』の基準を維持することができるだろうか？」（p. 13）と心配しながらも、開店から８年を経た「少年少女のための本屋」は、進歩的な取り組みにより、その基準を維持していると述べる。ブックキャラバンよりもさらに『ホーンブック』が書店とその友をつないでくれるだ

ろうと、創刊されたばかりのこの小さな雑誌に期待を寄せている（pp.14-15）。その後で、サンタクロースの袋から落っこちて以来書店にいる、アリス・ハイジというお人形の紹介が続き、最後に「ブックショップ・ノート」として書店の近況報告を掲載している。表紙には「三人の陽気な狩人たち」の絵とともに、この雑誌が「少年少女のための本屋」より年4回発行されることが記されており、裏表紙には1667年の角本（ホーンブック）を持った小さな女子生徒の絵が中央に小さく描かれている（図版２）。

図版２『ホーンブック』創刊号裏表紙から

この創刊号は、関心を持ってくれそうな人々に送られた。子どもの本の編集者第１号のマクミラン社のルイーズ・シーマン（Louise Seaman Bechtel, 1894-1985）は賛辞を惜しまず、８人分の購読料として４ドルの小切手を同封した。アン・キャロル・ムーアはすぐさま購読を申し込んだ。ただし彼女らしいことに、雑誌が安定する1926年までその評価を保留した。インディアナポリスで書店を経営し、「子ども読書週間」やニューベリー賞、コールデコット賞を創設し、[7] バーサに書店経営のいろはを教えたフレデリック・メルチャー（Frederic G. Melcher, 1879-1963）は創刊を祝いつつも、３ページも白紙で、裏表紙にホーンブックを持った女の子の絵以外何も載せないなんてもったいないと手紙で言ってよこした（Eddy, p. 123）。しかも驚くべきことに、商売っ気のない発行人は、購読料を掲載することを忘れていたのである。

1925年３月発行の第３号からは目次がつき、雑誌としての体裁が整ってくる。１月に書店で行ったレズリー・ブルック展を受けて、アン・キャロル・ムーアがブルックについての評論を寄せている。実質的な記事としてはブルックの紹介がこの雑誌ではもっとも早いものであるが、第２号の「ブックショップ・ノート」でブルック展の予告がなされ、実際の展示があって、この雑誌記事が読めるという一連の流れができあがっている。書店の広報媒体としての役割に留まらず、深くブルックを知るきっかけを雑誌が提供している。彼の画風だけでなく、ムーアのブルックとの出会い、個人的な思い出も盛り込まれた親しみのもてる記事である。この後に続くアイルランド出身の作家パードリック・コラム（Padraic Colum）を紹介したルイーズ・シーマンの記事も読み応えのあるものである。

雑誌の刊行に関わる細かな仕事はエリナーが引き受け、雑誌の内容を決めるのはバーサであった。バーサは寄稿者に「親しみがもて、誠実で、建設的な優れた批評」を求めたと言われているが（Eddy, p.124）、ムーアもシーマンも編集者の期待に見事に応えている。シーマンのコラム紹介（“Stories out of the Youth of the World--as recreated by Padraic Colum”）ではギリシャや北欧の神話や叙事詩を再話したコラムの作品を紹介している。マーカスはマクミラン社からコラムの本が出版されていることを紹介し（マーカス、p.142）、シーマンの筆に力が入る理由も示唆しているが、文章からはコラム作品の雄大な魅力が伝わってくる。

> コラム氏はこれら（ギリシャや北欧）の叙事詩から今日の子ども達のための文学作品を創り出しています。なぜなら、氏は、子どもは自分達の民族の遺産としてこのような作品に知り合うべきだと考えているからです。（中略）コラム氏は、「全体像」を形成する習慣こそ身につけるべきであって、現代社会の傾向となっている「断片」を子ども達に与えてはいけないと考えておられます。子ども達は、物語が一晩中続いて語られていたような時代に慣れているのです。子ども達が深く感じ、一冊の本が繰り広げる人生を、文学を、完全に感じとる力を子ども達が失うことがありませんように。いにしえの人々が聞いたように「吟遊詩人」の声を子ども達が聞けますように。私たち子どもは、この海と風の広大な背景に対して、寂寞と広がる平原に対して、また孤独な伝令が駆る馬の蹄の音を聞いて自分自身をとても小さい者と感じます。（March, 1925. p.18）

シーマンの記事は、いつの間にか読み手が小さな子どもと自分を同一化し、吟遊詩人の声に耳傾ける場に座っているように錯覚させることで、コラムの再話の臨場感を十分に伝えるものである。ちなみにシーマンは 1919 年に 24 歳の若さでマクミラン社の少年少女書籍編集部の編集者に抜擢された。彼女の文章からは文学的な価値を見分ける眼力と、それを感動的な言葉で表す文章力を持ち合わせた女性であったことが窺える。

大恐慌による不景気の影響は受けていたものの 1933 年発刊の『ホーンブック』第 9 巻になると、装丁が美しく凝った作りになる。しかし読み物が充実し、ページ数が増え、ヘッダーのデザインも新しくなり、これまでは季刊誌であったものが、年 6 回の発行となるのは 1934 年刊行の第 10 巻からである。1924 年の創刊から 10 年経過し、『ホーンブック』の成熟期

を迎えたのがこの年であろう。年 6 回の発行のためには助っ人が必要だった。そこで『アトランティック・マンスリー』（*The Atlantic Monthly*）の編集者であったビューラー・フォルムスビー（Beulah Folmsbee）がこの年から加わり、装丁と編集面で雑誌を充実させた。さらに創刊時からのバーサの良き相談相手であり寄稿者であった図書館員のアリス・ジョーダンとアン・キャロル・ムーアも力を貸した。ムーアは、1936 年 9 − 10 月号から 1960 年にムーア自身が亡くなるまで、「三羽のフクロウ・ノートブック」を執筆し、この雑誌の権威を高めた。ジョーダンも 1939 年から 1950 年までブックリスト欄を担当した。1940 年にジョーダンが紹介した本は 117 冊、絵本出版が盛んになった 1940 年代が終わる 1949 年には 294 冊の書評を書いている。この 11 年間で 65 回分のブックリストをジョーダンは担当したが、そのために 2000 冊のレビューを書いたことになる（Ross, p.180）。ジョーダンの貢献はブックリストのみではない。1934 年 1 月発行の第 1 号の “Children’s Books in America: The First Two Hundred Years”（「アメリカにおける子どもの本：初めの 200 年間」）に始まる、文学史的価値のある時代ごとの子どもの本や雑誌の書評をたびたび寄せている。バーサとエリナーは 1934 年に書店経営から手を引き、1936 年には書店が他社に売却されたのを機に、『ホーンブック』に時間とエネルギーを傾注した。そういう意味で 1934 年は改革の年でもあった。

号を重ねるうちに雑誌としての体裁が整ってくると、バーサは『ホーンブック』の基本的な編集方針をたてた（Ross, p.132）。

①もっとも重要な記事は最初に置き、その号のトーンを決め、読者を誘い込む。
②最後にもう 1 篇、強めの記事を置き、その号が尻すぼみにならないようにする。
③短い記事も長い記事も、内容面と多様性の面でバランスがとれるようにする。
④ブックリストは読者にとって望ましい変化となるようにする。
⑤イラストや詩は、文字だけのページの硬さを破り、ブックリストが単調になることを避けるために用いる。

バーサが巻頭言で記した、子どもの文学に貢献した人々についての「短いスケッチ」は、この雑誌の一次資料としての価値を高めるものである。各号の最初に置かれた特集記事では、作家や画家を特集し、編集者や図書

館員、あるいは別の作家などがその業績を評価している。また、作家や画家自身の生の言葉を読者に伝える特集もある。このような企画から、ニューベリー賞やコールデコット賞受賞スピーチが掲載されるようになり、それらが後に本として出版されている。[8] これらは20世紀のアメリカで読まれ愛されていた子どものための物語や絵本を知る上で貴重な資料である。バーサの伝記を著したRossは、図書館員や本の作り手である編集者らと協働して、バーサらは本を創り、出版し、評価した。そして広くそれを知らせることで、これまでに類のない子どものための文学を生みだしたと評価している（Ross, 126）。バーサ自身、実質的な編集から退いた後の1958年に友人に宛てた手紙で、彼女の雑誌は「フォロワーではなく、リーダーでなければならない」と意気込みを明らかにしている（Ross, p.130）。

書店の広報誌として出発した『ホーンブック』は、バーサや子どもの本に詳しい人々の子どもの文学に関する哲学を発信する媒体として成長していく。続いて『ホーンブック』の特徴的な例として「子どもの文学のためにもっとも貢献した人々」の中からイギリスのビアトリクス・ポター（Beatrix Potter, 1866-1943）を、「覚えておかなければならない人々」の中からストーリーテラーのマリー・シェドロック（Marie L. Shedlock, 1854-1935）を扱った号を取り上げて詳しく見ていきたい。

2．ビアトリクス・ポター特集

『ホーンブック』では、一度紹介した作家や画家をたびたび取り上げることで、読者が作家や画家へ親しみを感じ、やがて古くからの知り合いのような気持ちになるというパーソナルなアプローチが特徴的である。たとえばビアトリクス・ポターに初めて言及するのは、第3巻3号（1927年8月号）である。ここでは“Peter Rabbit and his Homeland”（「ピーターラビットとその故郷」）と題して、湖水地方の景観保護のための土地買い取りへの協力要請をしたポターからのバーサ宛ての手紙を載せ、読者にポターのサイン入りの絵を1枚5ドルで購入して資金集めに協力するよう求めている。翌1928年2月号の第4巻1号のHenry P. Coolidgeによるヒルトップ訪問記（“A Visit to Beatrix Potter”）を経て、1929年の第5巻1号（2月号）では、同年秋にマッケイ社から出版される予定のポターの *The Fairy Caravan*（『妖精のキャラバン』）の第一章“Over the Hills and Far Away”（「丘を越えて遠くへ」）が掲載されている。同年11月号の書評でアリス・ジョーダンは、動物達の気ままなキャラバンでありながら、実在の土地の雰囲気を伝えており、空想と現実の幸せな融合を特長とした

まれに見る物語であると評している（November, 1929, pp. 9-11）。

1929 年はバーサとエリナーが編纂した『黄金の国』が出版された年であるが、この本の口絵は、木戸の下からくぐれずに泣いているピーターラビットのカラー挿絵でポターのサイン入りである。上着と靴を失くし、入って来た木戸が見つからず、片手を口元にあて、片足をもう片方の足の上に置いて、涙を流してたたずむ少し太ったうさぎは、子どもの姿そのものである。[9]『黄金の国』が紹介する 500 年の子どもの本の歴史は、まさにピーターのような主人公が織りなす物語で形作られたものである。そう考えると、このピーターの口絵はこの大著を飾るにふさわしい選択である。

『黄金の国』の中の「ピーターラビット」シリーズの紹介欄では、この本が「どうしてできたのか？」との問いへのポターからの返答が一部掲載されている（pp. 62 − 64）が、第 5 巻 2 号（1929 年 5 月号）で "'Roots'of the Peter Rabbit Tales"（「ピーターラビットのおはなしの根っこ」）と題してポターからの手紙のほぼ全文が紹介されている。この手紙でポターは、自分の出自から、子ども時代の読書や楽しみ、讃美歌やバラッドの作曲、ものを書こうとした試みや学校へ行かなかったことまで、子ども時代の思い出を詳述している。さらに湖水地方からインスピレーションを受けてピーターラビット創作に至ったのではないことを作者は告白している。むしろそれは、(1) メイフラワー号に乗ってアメリカに渡ることを選ばず、残って迫害に耐えた頑固で現実的な家系、(2) 子どもの頃に過ごしたスコットランド高地地方での経験とそこで妖精や魔女の存在に親しんだこと、そして (3) 極めて早熟で鮮明に残っている子ども時代の記憶であった。後にバーサは「天賦の才能を説明できるとしての話だが、この手紙はどのようにして『現実と妖精の世界の見事な融合』が可能となったのかを説明しているようだ」と先のジョーダンと同じように評し、この手紙をもっとも重要な手紙と位置づけている。（*The Horn Book*, May, 1944）

その後ポターについては、1930 年、1935 年、1937 年に紹介があるが、1941 年 5 月号では "Beatrix Potter and her Nursery Classics"（「ビアトリクス・ポターと子ども部屋の古典」）と題して、バーサ自身がすばらしいポター論を展開している。そこで彼女は、なぜポター作品が古典として子ども達に愛されてきたのかを論じる。その理由は、作者がよく知っており、こよなく愛している事物が、事実に即した語り口で語られているからであるとする。そして、空間も家具も食器も動物達もすべて、本物らしく描かれているからこそ、その語りが説得力を持つのであろうと論じる。さらにはポターのユーモアを子ども達が喜ぶことに加えて、自然描写と、自然の

中で生きる人々が身に付けた常識も作品の特徴として挙げている。ポターの文体については、聖書とシェイクスピアとランカシャーの田舎の直截な力強い方言の影響を指摘している。バーサは、ポターの作品を彼女の住んだ自然豊かな地方への作家からの応答として捉え、そこから生まれた『妖精のキャラバン』を自分の小さな孫娘がどんなに愛しているかを示すエピソードで評論を結んでいる（p. 233）。

1942 年のポターの “The Lonely Hills”（「人里離れた丘」）と題した寄稿文は、前年のバーサの評論に対するポターからの応答であろうか。音楽と記憶をテーマにした文章であるが、「手紙は来ない。もう一月たっても、デンマークからの手紙は来ない。あわれなデンマーク。あわれなヨーロッパ。恐怖の黒いカーテンの背後で沈黙している」との文はナチス占領下の緊張にあるヨーロッパの姿を浮かび上がらせる。デンマークは北欧諸国の中で一早く、ナチスに占領されたのだった。しかしポターは戦争のことを書かない。音楽によって思い起こされる愉しい記憶とモリスダンスの記憶から妖精達のダンスへと想像の翼を広げる。最後には、山々にかかる霧を再び「黒いカーテン」に例えつつ、「『はるか昔の不幸な事どもや昔の戦』の記憶も昨日と今日と明日の悲しみも、広大な荒れ山が平和のマントで覆っている」と結んでいる。人が感情を投影することを拒み、何事にも動じない荒れ山は戦争の影響をもはねつけることで、人間達の悲しみをも覆ってくれる。そこにポターは慰めを見いだしている。自然保護に力を入れたポターらしい、自然への愛着と畏敬の念を感じさせる文章である。

1943 年に亡くなったポターを追悼するため、1944 年 3 － 4 月号（第 20 巻 2 号）では 1941 年にポターが『ホーンブック』に寄せた手紙を掲載している。これは 1942 年の「人里離れた丘」の前に書かれたものであるが、“The Strength That Comes from the Hills”（「丘からやって来る力」）と題した短文である。「自然は変わらないが、町ではいろいろなことが変わっている。人々はうさぎのように地面に穴を掘り、40 年以上前にピーターを描いてあげた足の悪い男の子は、今空襲を受けているロンドンの教区で空襲監視員をしている」（p. 28）と書き始め、以下のように結ぶ。

> 私はいつも、野生の植物や動物、シダ類や、コケ類、森や早瀬や田舎のあらゆるものに囲まれて絵を描いたり、自分の妖精の国を創り出そうとしたものです。あの現実とロマンスの愉快で変わらぬ世界。それは私達の北国の気候では、厳しい天候や、頑固な先祖たち、丘からやって来る力によって強められるのです。（p. 29）

戦時下で、自然から得る厳しい力を喜び耐え忍ぼうとするポター－むしろ牧場経営をするヒーリス夫人と呼ぶ方が適切かもしれない－の力強い姿が見えるようである。

1944 年 5 － 6 月発行の『ホーンブック』20 周年記念号（第 20 巻 3 号）では、彼女の遺作となった *Wag-by-Wall*（『壁の振り子時計』）を紹介して、前年 12 月に亡くなったビアトリクス・ポターを追悼している。この作品はもともと 1943 年 11 － 12 月号に掲載予定であったが、20 周年に合わせて本号に載せることになった。ポターはバーサ宛ての手紙の中で『ホーンブック」の 20 周年記念号で自分の作品が掲載されることを楽しみにし、それまでにできるだけ文章を磨きたいと書いていたが、彼女は校正原稿を見ることなく 77 年の生涯を閉じた。バーサ自身も “Beatrix Potter in Letters”（「手紙に見るビアトリクス・ポター」）と題した追悼文を寄せている。ポターの『壁の振り子時計』は彼女の死後、バーサによるまえがきを添えて 1944 年にホーンブック社から出版された。小ぎれいな小屋に満足して住むサリー・ベンソンに襲いかかる貧しさと彼女に幸福をもたらす魔法の振り子時計の話だが、地に足のついた現実的な主人公の生活と歌うやかんや振り子時計が象徴する空想世界が「見事に融合」している。ここでも主人公サリーはヒーリス夫人となったポターを彷彿とさせる。大戦中にドイツの攻撃を受けて苦しむイギリスにいるポターに対して、バーサは小包みを送って支援しており、二人は一度も会うことがなかったが（Ross, p.185）、その友情はポターの死まで続いた。読者は作品のみからでは決して知りえることのない、作者がどんな環境で何を考え、何を感じ、何を真実としてきたのかを『ホーンブック』を通して知ることになる。長期購読してきた読者なら、単に「ピーターラビット」の作者としてのポターではなく、人間ポターに出会い、親近感を感じ、同時代人として感じていたに違いない。まさに 15 年を超えるつき合いの中で、バーサとポターの友情に与る形で、読者も顔と顔を合わせて出会ったことのない作家との友情を感じることができるのである。このような友情の共有をとおして、作家や画家や図書館員、一般読者の間のコミュニティ作りをバーサは目指していたのではないかと考える。それが、子どもに関わる人々を豊かにすると彼女は信じていたのだろう。

３．マリー・シェドロック特集号

1934 年の特筆すべき号は、5 月発行の第 3 号であろう。これは 80 歳を迎えたストーリーテラーのマリー・L・シェドロックのお誕生祝い特集号

であり、雑誌全体がシェドロックに捧げられている。この号の編集にはムーアが関与し、巻頭記事でシェドロックを紹介している。シェドロックとムーアのつきあいは、ムーアが駆け出しの図書館員だった頃、プラット学院のムーアの恩師で、新しくできたプラット図書館の責任者であったメアリー・ライト・プラマー（Mary Wright Plummer）が、1902 年にプラット図書館に招いて以来のものである（金山 (1)）。シェドロックの語りを聞いたムーアは、その後、プラット図書館でもニューヨーク公共図書館でも、ストーリーアワー（おはなしの時間）を充実させていった。ストーリーテリングが子どもと本との距離をぐんと縮めることを見てとったからである。

“The Fairy Godmother Marie L. Shedlock”（「妖精のおかあさんマリー・L・シェドロック」）と題した評論で、ムーアは初めて子ども達と聞いたシェドロックのストーリーアワーを鮮明に回想している。1903 年冬の土曜の朝、児童室には日光が明るく射し込み、窓辺にはチューリップやプリムローズが活けられていた。部屋いっぱいのさまざまな人種の子ども達を前に、シェドロックは、ホーソンやアンデルセン、日本の昔話等を語った。部屋は魔法にかけられたようだったと言う。その中で一人の女の子が投げかけた「あの方は妖精ですか？それとも普通の女性ですか？ミス・ムーア」との問いから、シェドロックは「妖精のおかあさん（代理母）」と呼ばれるようになったとムーアは記している（p. 139）。シェドロックは 2 回にわたる 12 年にのぼるアメリカ滞在で、各地でストーリーテリングをして回り、多くの大人と子どもを魅了した。戦時中であってもシェドロックは聞き手の頭の中に、「絵を創り出し、音楽、詩、陽気さ、そして穏やかさをもたらした」とムーアは回想する（pp. 142-143）。

この特集号では各地でシェドロックの語りを聞き、彼女に魅了された人々が誕生祝いのメッセージを寄せており、その数は 20 人ほどになる。トロント公共図書館の主任ジョージ・H・ロック（George H. Locke）は、シェドロックの語った言葉が聞き手に与えた影響をよく覚えているとして、シェドロックはシーザーのように「来た。見た。勝った」と称えている。同じくトロント公共図書館の「少年少女の家」のリリアン・H・スミス（Lilian H. Smith）は話を聞いて、「子どもにとって、すべての文学はドラマであり、物語である。その文学作品が完成されていればいるほど、それはドラマチックで、人生の魅力を高めてくれる」ということを確信したと言う（p. 156）。当時コロンビア大学の学生だったルース・ソーヤー・デュランド（Ruth Sawyer Durand）は、ストーリーテリングをライフワークにすることを誓っている（p. 162）。この後アメリカでストーリーテリ

ングを使命とした人々の数と彼らの働きを見れば、シェドロックが絶大な影響を残したことは明らかである。

そのような語り手の一人、ニューヨーク公共図書館のメアリ・グールド・デイヴィス（Mary Gould Davis）が、“The Story-Teller's Art”（「ストーリーテラーの技」）と題した論考を寄せている。実際に子ども達に語っている人ならではの視点が豊富な、それでいて経験主義に陥ることのないストーリーテリングという芸術への深い理解と洞察に溢れた文章である。

アリス・ジョーダンも “Story Telling in Boston”（「ボストンにおけるストーリーテリング」）と題して寄稿している。シェドロックがストーリーテリングをアメリカにもたらしてから 30 年以上経ち、何千何万という子ども達がストーリーアワーを楽しんできた。ある日、語り手を乗せた若いタクシー運転手が、「子どもの頃にあなたたちから聞いたお話が忘れられない」と言って自己紹介し、今でも自分の関心は文学にあると言って別れたというエピソードを紹介している。ストーリーテリングと子ども達を長年見てきたジョーダンは、子どもは古典には興味がないと上辺だけで判断する人々が間違っていることを、いくつもの例を引いて証明している。子ども達は『ラインの黄金』やアーサー王伝説や北欧神話など、驚くほどレベルの高い古典を楽しんでいた。またプロットの楽しみだけでなく、“tree of jade”[10] のような神秘的な感じのする言葉そのものが子どもの心に深い印象を刻んだ例も紹介し、言葉との出会いもストーリーテリングの魅力としてあげている。

シェドロック自身の *The Art of the Story-Teller*（『ストーリーテラーの技』）が語り手の視点からの実践的な示唆に富む本であるとすれば、図書館員のデイヴィスやジョーダンによるストーリーテリングの考察は、子ども達の反応を踏まえたストーリーテリングの価値についての文学的な論考と言えよう。それぞれ図書館員として、実際に子ども達がストーリーテリングをどう受け止めているか、子ども達が文学とどのように出会っているかを洞察を交えて紹介しており興味深い。

1934 年 5 月号はこうしてシェドロックの誕生日を祝って彼女に捧げられたのだが、翌 1935 年 1 月マリー・シェドロックは 80 年の生涯を閉じた。

4．バーサ・マホーニーその人である雑誌『ホーンブック』

「少年少女のための本屋」を「バーサ・マホーニーその人である本屋」と呼んだのは、バーサの師であり、良き協力者であるアリス・ジョーダンであった。[11] これまでのわずかな紹介からも、バーサの価値観や人柄が

『ホーンブック』の基調をなしていることが分かり、この雑誌を「バーサ・マホーニーその人である雑誌」と呼ぶことができよう。

『ホーンブック』は特定の出版社の出版物を扱う雑誌ではなく、中立的な立場で、どの出版社のものであっても、雑誌編集に関わる人々が評価するものを掲載した。しかし、『ホーンブック』に対する批判的な見方がないわけではない。出版者からなぜ自分の出した本を取り上げないのかと突き上げられることもあった（Eddy, pp.149-150, 154-155）。もう一つの問題は、1928 年 8 月号で出した、初代児童書編集部の編集者となったマクミラン社のルイーズ・シーマン特集である。ここではシーマンの業績を評価するとともに、彼女の出版した書籍のリストを多数の挿絵をつけて紹介し、加えてマクミラン社の社長の文章を載せている。バーサ自身も過去 10 年間の出版状況を振り返り、10 年前からすぐれた子どもの文学が出版され始めたのであるが、それと同時に読者は質の良い白黒の挿絵よりも内容は薄いがカラーで目を引く挿絵の入った質の悪い本を選ぶようになったと言う。カラー印刷の技術は取得できても、良い絵本は出て来ず、相変わらずイギリスからの輸入本に頼っていた。しかし、1928 年にマクミラン社に少年少女書籍編集部が設置され、ルイーズ・シーマンがその責を担うことになって事態が変わったとし、シーマンの功績を称えている。しかし、この特集に関して後に、「マクミラン社からお金をもらっているのか」という批判が寄せられ、バーサをいたく傷つける結果となった（Ross, p.133）。やがてはその傷から立ち直り、1936 年には生きている同時代人でも称えるべき人を称えようと、メイ・マッシー（May Massee, 1881-1966）特集を組むに至った。

先に言及した Eddy は、彼女ら bookwomen は、急速な変化を遂げたアメリカではなく、「もっと単純な」アメリカをノスタルジックな思いで記憶しており、彼らは子どもを「喜び」「ワンダー」「美しさ」というような「薔薇色の言語」と結び付けて見ていると分析する。子どもの自殺者数や暴力被害に遭う子どもの増加に言及し、バーサらのものの見方が現代アメリカの子どもの現実とはかけ離れていることを示唆している（Eddy, pp.163-164）。マーカスも、特に古典を重視する彼らの選書方針について批判的である。しかし、彼らが紹介した子どもの文学の多くが古典も新しい作品も含めて、未だに読み継がれていることを考えれば、その大方の選書の正当性は証明されていると言えるだろう。アン・キャロル・ムーアと対立していたルーシー・スプレイグ・ミッチェル（Lucy Sprague Mitchell）（金山(2)）についても、彼女の教え子であるマーガレット・ワイズ・ブラウン

（Margaret Wise Brown）の評論とバーサ自身の書評を載せて評価している（*The Horn Book*, May-June, 1937）。新しい考え方にも目を向けるバーサのバランス感覚と開かれた思想の現れと言える。

『ホーンブック』の特徴はその文学性、同時代性と読者参加型のコミュニティ性にある。[12] 当時活躍する詩人や作家の詩や作品の一部を掲載するに留まらず、作者がどのような環境に育ち、何を考え、何に価値を置いて生きているのか、子ども達に何を伝えたいと考えている人なのかを、その作者自身の言葉により読者に伝えている。またどの書き手も見事な文章の書き手であり、書評そのものが読んでいて実に愉しいものである。これにはバーサの編集方針－親しみがもて、誠実で、建設的な優れた批評－が反映されているのであろう。そして最も重要な点であるが、取りあげる作品の選定に、編集者らの子どもの文学に対する態度が反映されている。さらにはバーサ自身の「論説」や書評における子ども達への関心と愛の伝わる文章の数々が、この雑誌の性格を決めている。

同時代性という面では、19 世紀半ばから 20 世紀にかけて夥しい数の移民がアメリカに渡ったことが顕著な社会現象としてあげられる。[13] 特に第一次世界大戦、第二次世界大戦中に命の危機を感じた人々がアメリカに渡った。実際、後にアメリカで活躍する作家や画家の多くが戦禍を逃れて渡って来た人々であったのだ。バーサ自身、ニューヨーク公共図書館を訪問した際に子ども達の人種的な多様性に感銘を受け、何か輝く感じを今なお記憶にとどめていると言う。「子ども達ははっきりと個人として認識されていました。そして今私たちの国の一員となった他の国々からやってきた人々に対する理解とそれを評価する雰囲気がありました」（“A Quick Ear for Silver Bells”, February 1927, p. 18）と記している。さらに 1929 年の大恐慌を契機に、1930 年代には「私たちはこの問題を解決できるだろうか？」（1932 年 8 月号）を始めに、3 回にわたってハーヴァード大学の先生に大恐慌についてわかりやすく解説してもらっている。

バーサの「論説」には同時代の現実や問題を直視するものが多い。彼女は社会の動きに敏感に反応し、移民としてアメリカに渡ってきた人々や子ども達に思いをはせ、子ども時代に出会った文学の力を思い出させる。

> 今日新しい人々の大きな流れがあります。子ども達の大きな流れがあります。苦痛や悲しみを感じ、家を失くした子ども達を何が支えるのでしょう？それは勇気です。偉大さ、忍耐、信頼を象徴する言葉によって育てられた勇気です。勇敢な者達を今力づけてい

る多くの象徴的な言葉は、子ども時代に蓄えられたものです。（*The Horn Book, May*, 1939）

『ホーンブック』の第2号にあたる1924年11月号でバーサは大人のためのブックリストに米国の黒人差別をとりあげたものを紹介している。彼女のマイノリティに対する意識は弱まることはなく、戦時中も日系アメリカ人の収容所問題を取り上げた論考を掲載している（Ross, p.184）。バーサは加害者としてのアメリカ国民に厳しく問う。

アメリカは今不正に対して恐ろしい戦争を戦っています。そして同時に、私たちの国の中で、アメリカ国民は私たちの敵と同じような仕方でマイノリティの人々を迫害しています。人種や肌の色がどうであろうと同じ国民－このマイノリティの多くがアメリカ国民なのです－に私たちがどう接するかが、アメリカ合衆国の未来にとって最も重要なことなのです。（*The Horn Book*, August, 1943）

そして、このような苦しむ人々への共感を生みだすのは想像力である、と他者への共感に満ちた力強い言葉で語る。

良い市民になるには想像力が必要です。他の人々の苦しみを察するには想像力が必要です。自由が何を意味し、なぜ自由のために生き、死ぬことに価値があるのかを理解するためには想像力が必要です。（*The Horn Book*, October, 1941）[14]

そのような想像力こそ文学を生み出す力であり、文学によって育てられる力である。

バーサは新しい移民に目を向けるだけでなく、創刊当初からアメリカを構成する様々な人種や民族、そして彼らが継承してきた文化的な遺産に目を向けていた。ギリシャ、北欧、ケルトの神話や叙事詩、アーサー王伝説の他に、アメリカ先住民やメキシコの物語等を幅広く紹介している。同時に、民族の遺産を継承することと、個人としての子どもを尊重することをバーサは常に重要視していた。

バーサのこのような意識は何に根ざしているのだろうか。バーサの子どもと文学についての論考が初めて載った1926年6月号の「子どもと孤独」（“Children and Solitude”）と題したエッセイで、彼女は4冊の本を紹介

している。バーサは「子ども時代は、ものを見る眼がもっとも鋭く、印象が最も深い時期。自然の美しさは、限られた時間や、ただついでに、とか、二つの約束の合間に探り出し、楽しむことなどできないものなのです」と語る（p. 4）。「…もっとも真実な喜びをもたらす自然との一体感を感じるには、子どもは一人でなければなりません。ボーイスカウトやガールスカウトの団体で行う「ハイキング」やグループリーダーに率いられるグループでの散歩ではこのような機会は作られません。…自然の中で豊かに生きている感覚を望むのならば、長いのんびりとした自由で孤独な散歩が必要なのです。」この論考をバーサは、「そして私自身の経験から知ったことですが、大人にとって必要なように、ある程度の孤独は子どもにも必要なのです」（p. 7）と結んでいる。「アメリカ人」や「○○系移民」という集団への帰属意識に訴えるだけでなく、子どもを個人として尊重するという複眼的な態度が、急激な変化を遂げる社会にあって、彼女をして絶妙なバランス感覚を持って『ホーンブック』の舵取りを遂行させたのである。

1969 年 10 月のバーサ・マホーニー・ミラー追悼号で、エリザベス・オートン・ジョーンズ（Elizabeth Orton Jones）がバーサとの出会いによって絵本の仕事をすることになったいきさつを振り返っている。彼女は母親が送ってくれた『ホーンブック』のバックナンバーを何度も読み返し、バーサがこの雑誌を通して、『北風のうしろの国』の北風が「こっちよ、こっちよ」とダイヤモンド少年を手引きするように、『ホーンブック』が自分に「こっちよ、こっちよ」と語りかけ続けてくれたと回想している。「こっちよ」の声は他でもないバーサの価値観を表している。このような若い作家や画家にとっても、『ホーンブック』は教育的な役割を果たしていた。

おわりに

『ホーンブック』を通読することで、編集者が何に価値を置き、どんな本を読者と共有したいのかが見えてくる。今回取り上げた記事はその中のほんの一部にすぎないが、これらの記事をとおして、物語の創り手であるビアトリクス・ポターの生き方や物語の語り手であるマリー・シェドロックがアメリカの子ども達にもたらした豊かさを指摘した。これらの記事は大人を対象に書かれたものであるが、ポターの個人的背景など子ども達には関係ないと言えるだろうか？子ども達は物語そのものを楽しむだろう。しかし、子ども達にポター作品を語ったり、一緒に読んであげる大人が、ポターの精神を知っているのと知らないのでは大違いであろう。いつか子

どもにポター自身のことを伝える日が来るかどうかは問題ではない。シェドロックは彼女が語るアンデルセン童話をよりよく理解するためにデンマーク語を勉強したという。[15] それもシェドロックなりのアンデルセンと子ども達への誠意の示し方であろう。重要なのは大人の側の豊かさの蓄積である。困難な時代にあっても、バーサは言葉のもつ力とそれを受け取る子ども達の力を信じ、アメリカの子どもの文学の創出と普及に貢献した。『ホーンブック』をとおして、子どもの文学にぶれない方向性を与え、目に見えない豊かさを子ども達と子どもと本をつなごうとする大人達のなかに確かに育てていたと言える。

Eddy が bookwomen と呼ぶ人々の使う言語に関して、彼らの語彙の特徴である「真実」「美しさ」「喜び」というような語の多用を指摘したことは先に述べた。それが回顧主義的で「バラ色のメガネをかけた見方」であるとか「甘ったるい言語」であるという批判もある。しかし 20 世紀の物質主義的な価値基準の中で、これらの言葉が時代遅れに感じられることがあるにしても、これらの言葉が普遍的な人間の憧れを表わす言葉であることは否定できまい。最終的に好きな本を決めるのは子どもであるが、1920 年代から 40 年代にかけて出版された『１００まんびきのねこ』『げんきなマドレーヌ』『ひとまねこざるときいろいぼうし』等の絵本や、各国の昔話やアンデルセン童話などが 70 年以上経った今も読み継がれている背景には、これらの本のもつ力も然ることながら、真実や美しさや喜びを希求する人間の内的欲求に応える本を子どもに手渡してきた大人の存在があるからであろう。図書館員のアン・キャロル・ムーアが思想と実践のリーダーシップを発揮して、子どもとよい本をつなぐ活動を展開したのと同じような時期に、書店員やがては雑誌発行人としてバーサ・マホーニー・ミラーは文学性、同時代性と読者と本の創り手とのコミュニケーションの場を提供する『ホーンブック』を刊行し、子どもと本に関わる大人を豊かにし、子どもを尊重することを教えた。まさに想像力と創造力の仕事である。今後も『ホーンブック』を使いながら、作家や画家、編集者の働きについて考察していきたいと考えている。

引用文献

Children's Services Division of the American Library Association, "A Salute to Bertha Mahony Miller, " *The Horn Book Magazine*, August, 1959.

Davis, Mary Gould, "The Story-Teller's Art," *The Horn Book*, May, 1934.

Eddy, Jacalyn, *Bookwomen; Creating an Empire in Children's Book Publishing 1919-1939*, The University of Wisconsin Press, 2006.

Field, Elinor Whitney, "Bertha Mahony Miller," The Hunt Breakfast, *The Horn Book Magazine*, October, 1969.

Fryatt, Norma R. ed., *A Horn Book Sampler; On Children's Books and Reading ~ Selected from twenty-five years of THE HORN BOOK MAGAZINE 1924~1948*, The Horn Book, Inc., 1959.

Jordan, Alice M., "Children's Books in America: The First Two Hundred Years," *The Horn Book*, January, 1934.

----, "Story-Telling in Boston," *The Horn Book*, May, 1934.

Mahony, Bertha, *The Horn Book*, October, The Bookshop for Boys and Girls, Boston, 1924.

----, "A Quick Ear for Silver Bells," *The Horn Book*, February, 1927.

Mahony, Bertha E. & Whitney, Elinor comp., *Realms of Gold in Children's Books*, Doubleday, Doran & Company, Inc., 1929.

Miller, Bertha Mahony, "Another Here and Now Story Book [by Lucy Sprague Mitchell]," *The Horn Book*, May-June, 1937.

----, "Beatrix Potter and her Nursery Classics," *The Horn Book*, May, 1941. (from *A Horn Book Sampler*)

----, "Beatrix Potter in Letters," *The Horn Book*, November-December, 1944.

Moore, Anne Carroll, "Our Fairy Godmother Marie L. Shedlock," *The Horn Book*, May, 1934.

Potter, Beatrix, "'Roots' of the Peter Rabbit Tales," *The Horn Book*, May, 1929.

----, "The Strength That Comes from the Hills," *The Horn Book*, March-April, 1944. (from *A Horn Book Sampler*)

----, "The Lonely Hills," *The Horn Book*, May, 1942. (from *A Horn Book Sampler*)

----, "Wag-by-Wall," *The Horn Book*, November-December, 1944.

Ross, Eularie Steinmetz, *The Spirited Life; Bertha Mahony Miller and Children's Books*, The Horn Book, Incorporated, 1973

金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々 (1) ～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第 22 号、敬和学園大学、2013.

----,「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々 (2) ～アン・キャロル・ムア②～」『敬和学園大学研究紀要』第 23 号、敬和学園大学、2014.

----,「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々 (3) ～バーサ・マホーニー・ミラー①～」『敬和学園大学研究紀要』第 24 号、敬和学園大学、2015.

----,「子どもと本との出会いを創る－アン・キャロル・ムーアと『七段の本棚』」『こどもとしょかん』第 147 号、東京子ども図書館、2015.

護得久えみ子、張替惠子協力「子どもの本に生きる－バーサ・M・ミラーの活力に満ちた生涯」『こどもとしょかん』第 129 号、東京子ども図書館、2011.

藤野寛之『児童批評誌「ホーン・ブック」の研究：歴代編集長と協力者 1924 - 2000 年』金沢文圃閣、2013.

ポター , ビアトリクス、久野暁子訳『妖精のキャラバン』福音館書店、2000.

マーカス , レナード S.、前沢明枝監訳『アメリカ児童文学の歴史：300 年の出版文化史』原書房、2015.

吉田新一「『ピーターラビットのおなはし』－絵本固有の批評基準を探る試み」、日本イギリス児童文学会編『英米児童文学ガイド：作品と理論』研究社出版、2001.

註

(1) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（1）～アン・キャロル・ムア①～」「同（2）～アン・キャロル・ムア②～」「同（3）～バーサ・マホーニー・ミラー①～」『敬和学園大学研究紀要』第 22 - 24 号参照。

(2) Bertha Mahony は 1932 年に William Davis Miller と結婚し、Bertha Mahony Miller となり、Elinor Whitney は 1936 年に William L. W. Field と結婚し、Elinor Whitney Field となったため、本稿では二人をそれぞれ名前で表記する。

(3) 『ホーンブック』の閲読、複写を許可して下さった聖心女子大学図書館、東京子ども図書館、東京大学教養学部外国語研究書庫にこの場を借りて御礼申し上げます。

(4) 藤野寛之『児童書批評誌「ホーン・ブック」の研究：歴代編集長と協力者 1921-2000 年』金沢文圃閣、2013。「ホーンブック」を取り上げた先行研究として藤野は、Eddy と Ross の著作の他に、2 冊の博士論文を紹介している。

(5) Elinor W. Field, “Bertha Mahony Miller,” The Hunt Breakfast, *The Horn Book Magazine*, October 1969. もともとは *Catholic Library World* の 1967 年 2 月号に掲載された文章である。

(6) Eularie Steinmetz Ross, *The Spirited Life; Bertha Mahony Miller and Children's Books* からの引用であるが、護得久えみ子、張替惠子協力「子どもの本に生きる－バーサ・M・ミラーの活力に満ちた生涯」『こどもとしょかん』129 号で引用、紹介されている部分は断りを入れて護得久訳を使わせていただく。

(7) ニューベリー賞はアメリカ図書館協会の下位組織である児童図書館協会から、毎年アメリカ合衆国で出版された優れた児童文学の著書に与えられる賞で、1922 年から始まった。コールデコット賞は同協会から、アメリカ合衆国で出版された優れた絵本の作者に与えられる賞で、1938 年から始まった。

(8) Edited by Bertha Mahony Miller and Elinor Whitney Field, *Newbery Medal Books*: 1920-1955, Boston: Horn Book, Incorporated, 1955, *Caldecott Medal Books*: 1938-1957, Boston: Horn Book, Incorporated, 1957 参照。

(9) 吉田新一「『ピーターラビットのおはなし』－絵本固有の批評基準を探る試み」が物語と挿絵について示唆的である。

(10) 文字どおりには「翡翠の木」であるがカネノナルキのこと。

(11) Alice Jordan, “The Bookshop That Is Bertha Mahony,” *Atlantic Bookshelf*, June 1929.

(12) 藤野はその特色を、古典の重視、批評家＝紹介者の数の多さ、読者への参加の呼びかけの三点としている。

(13) この時代の特色については、金山愛子「子どもと本との出会いを創る－アン・キャロル・ムーアと『七段の本棚』」『こどもとしょかん』第 147 号参照。

(14) “Time Voyages in Trust” と題する論説。ここに引用した 3 つの論説は、Ruth Hill Viguers, “Acceptance of the Regina Medal for Bertha Mahony Miller,” *The Horn Book Magazine*, October 1969, pp. 523-524 に再録されたものである。

(15) Mary Gould Davis, “The Story-Teller's Art,” *The Horn Book*, May 1934, pp.171-172.